# 住・まちづくりフォーラム かわら版（仮題）

ニューズレター第9号　1995年12月14日

9

特集　第9回 住教育フォーラム

○英国における住環境学習の現状と展望

# 第９回　住教育フォーラムの記録

主催　（財）住宅総合研究財団　住教育委員会

## テーマ　英国における住環境学習の現状と展望

・日　　時　１９９５年9月２６日（火）　午後６時３０分～午後９時３０分
・会　　場　せたがや女性センター「らぷらす」研修室（北沢タウンホール11階）
・講　　演　アイリーン　アダムス氏（英国ｻｳｽﾊﾞﾝｸ大学教育研究所研究員、環境教育ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ）
　通　　訳　マーク・ダンカン氏（造園家／緑化意匠・翻訳・通訳）
・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　名城大学理工学部教授（当時熊本大学）　住総研住教育委員会委員長　延藤　安弘
　〃　　東京学芸大学教育学部教授　住総研住教育委員会委員　小澤紀美子
・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ　千葉大学園芸学部助手　〃　木下　勇
　〃　　筑波大学附属小学校教諭　〃　町田万里子
・記　　録　跡見学園女子大学短期大学部助教授　〃　加藤　仁美
・参 加 者　建築系・教育系などの研究者・実務者、並びに大学院生・学生、
　まちづくりなどの活動家、関心のある主婦や高校生の方など９１名

・この「住・まちづくりフォーラムかわら版」は、住教育フォーラムの開催記録を仮にまとめたものです。将来、何回かのフォーラムの成果と、各委員の皆さんによる研究論文を合わせて、書籍として刊行する予定ですので、ご期待下さい。

・表紙デザイン、裏表紙カット＝町田万里子
・編集・文責＝事務局　間宮昭朗、小菅寿美子、平井なか

*○延藤　今日の主題は「イギリスにおける住環境教育の現状と動向」です。イギリスの環境教育は、非常に歴史が深いのです。今世紀初頭にパトリック・ゲデスが、エディンバラでアウトルック・タワーという展望台から、子どもたちとともに移り行く都市の環境の地理的、あるいは生態学的な都市計画に対する１つの教育的アプローチを始めました。教育することと、まちをつくっていくことを一体化するような試みが行われたので、パトリック・ゲデスは、「都市教育、環境教育の父」と言われておりますが、今日お見えのアイリーン・アダムスさんは、私に言わせれば、子どもとともに環境学習を学んでいくうえでの「環境学習の母」ではないかと思っています。*

*私はたまたま以前から、この種のテーマについて関心を寄せておりましたが、ちょうど15年ほど前に、アダムスさんの２冊の本に出会うことがありました。１つは『デザイン・イン・ジェネラル・エデュケーション』という、公教育における美術をどのように環境を通して学ぶかという本でした。もう１つは、『アート・アンド・ビューティ・エンバイロメント』という、芸術学習と環境教育をとり結ぶ非常に魅力的な内容の本で1983年に出されております。イギリスの住環境学習の宝物がいっぱい詰まっている本です。*

*今日お話いただきます内容は、現場でフィールド・ワークで子どもたちと感受性を高めながら、環境に深入りし、子どもたちの環境に対するセンスを高めていくという、環境と子どもの間の相互に浸し合うような、トランザクショナルな関係のデザインの実践です。*

*前半はアダムスさんにお話をいただきつつ、後半は皆さん方から日本の状況に照し合せて、いろいろなご意見、ご質問をいただき、できるだけ質疑応答の時間をたくさん持っていただきたいと思っております。その間を取り持っていただくマーク・ダンカンさんは、もともとランドスケープ・アーキテクトで、今日のアイリーンさんの卓抜たるお話の内容を、私たち日本人にも見事に伝えていただける、よき媒介者の役割をしていただくことになります。*

# 英国における住環境学習の現状と展望

## 講師：アイリーン・アダムスさん

最初に、私がここに来ることができたのは住総研、ならびに笹川ファウンデーション、ブリティッシュ・カウンセルのお陰であることを、皆様にお知らせしたいと思っております。心より感謝を述べさせていただきます。私はイギリスにおいても、建築家、プランナー、造園家、教師、都市計画の専門家の方々といつも仕事をしております。そして私は日本でも、ある学校に行って直接生徒たちと接する機会をいただき、また生徒たちと仕事をさせていただきました。私に生徒たちを任せてくださった勇気のある教師たちにも感謝したいと思います。ここで私たちは、ある共有する体験ができたと感じております。

今日お話する内容は美術、デザイン、環境、教育を結び付けるような話になっています。私たちはこのような人たちを集めて、環境教育というカリキュラムを作るために働いてきました。なぜわざわざ集めなければいけないかといいますと、もともと環境教育ができるように学校では教えられていないからです。

1970年代に王立美術大学では、一般教育とデザインという研究プロジェクトが行われていました。そこで１つ調査を行った結果、学校の中でグラフィック・デザイン、視覚デザイン、工業デザインなどに携わる教育があったにもかかわらず、環境デザイン的な教育の要素はなかったことが分かりました。

なぜそのような現状があるかと考えると、教師たちは環境デザインを教える訓練を受けていないからだと分かりました。このときに、例えば、建築家と教員たちを一緒に集めて、美術の中での環境教育を作り出すためにはどのようにすればいいのか、またどのような結果が得られるかを考えました。

そのとき私はたまたま教員として参加させられました。私たちは、どのようにして生徒たちに住む環境について考えさせ、また美術と環境をどのように結び付けて教えることができるかを考えました。私たちは生徒たちに、自分の玄関先で何が起こっているかを認識してもらおう、という意図の『フロント・ドア・プロジェクト』を作り、プロジェクトの報告を兼ねて、「フロント・ドア・ニュース」という報告書を作り、全国の関係者に配りました。

私たちの学校で実験されたこのことは、全国的なプロジェクトの発端となり、最初はイングランドとウェールズ、それからスコットランドなどに広がりました。

1970年代のイギリスの現状と同じように、日本でも教員たちは環境をどのように教えるかという教育を一切受けていない、という現状があると思います。私たちに与えられた仕事は、何が可能であり、何をすべきかといった課題づくりをすることです。これをきっかけにさまざまなプロジェクトをすることになりました。

例えば、『ラーニング・スルー・ランドスケープ』は環境を通して学ぶというプロジェクトですが、そこから校庭の中でのよい環境づくりを考え出すプロジェクトも生まれました。環境といいましても、いろいろな意味が含まれています。広い意味での自然環境、つまり、生態学的なことや自然なども含まれます。

私は日本に来て１週間経ちますが、感じたことが１つあります。教員が教えるように義務付けられた教科内容は、決められたことを教えなければいけないというのではなく、それを教員たちの１人ひとりが、どのようにして解釈し、教えるかが問題だと思います。その中で、教員たちのためのサポートが必要であることも強調したいと思います。さらに自分たちが教室の中で、環境教育などをやりやすい環境を作る必要があります。

私たちがこの仕事を始めたときは失敗する覚悟でやりました。まずこれはうまくいくはずがないと思いつつ、とにかくやってみたというのが本当のところです。そしてやってみて、このような結果を得ることができました。

私たちの仕事は環境と直接出会うことから始まります。「環境の中で、環境を通して、環境のための教育」という３大原則があります。また環境の認識から、環境のために行動を起こすというように導きたいと思います。

イギリスでは環境教育をすることが国の教育省で義務付けられております。しかし、これは１つの独立した教科としてではなく、各教科の中でそれを取り入れるというクロスカリキュラムとなっています。

もう１つのクロステーマとして、よい市民になるための市民教育があります。そして、この２つを結び付けようとしていると思います。つまり、環境デザインを通して環境を学び、よい市民になることを意識しながら仕事を進めております。

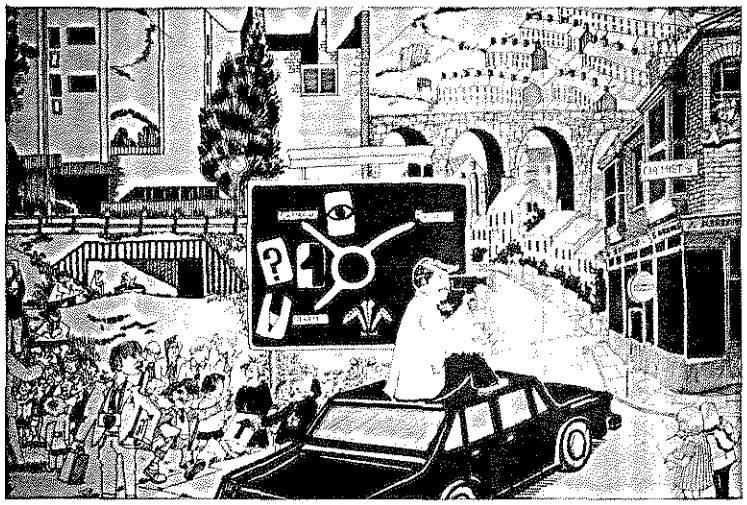
教員たちはこの仕事をするための研修を受けていないのであれば、どのようなサポートをすべきでしょうか。私たちは先に本を作って、その本に沿って教育を進めたのではなく、子どもたちに先に行動を起こさせ、子どもたちのやったことを本にまとめただけです。

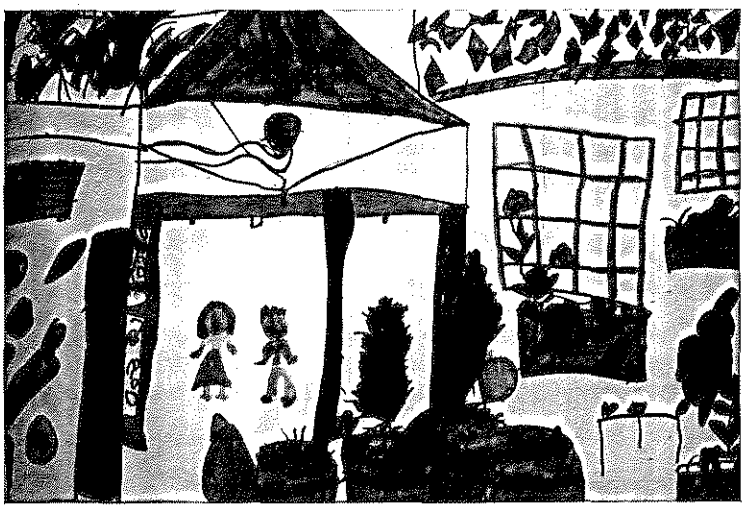
延藤先生が紹介してくださった本は、実験の段階で実施した学校の中での実施例をまとめたものです。このときは10校だけでした。それをきっかけに私は教員のためのコースを開発したのですが、それから何百もの国内の学校が、それを使っていろいろ実験を始めたわけです。それを見て、自分たちで実験した教員に、「あなたの体験を報告書にまとめて私によこしてください」と依頼しました。私は「どうせやらないだろう」と思い込んでいたのに、反響はすごくて、それに対応できませんでした。それで、私は、教員たちに地元の建築家、プランナーの人たちと協力してワーキング・パーティを作り、自分たちの教育のやり方について研究した報告をまとめてもらうことにしました。それぞれのワーキング・パーティに実験結果をイラスト入り４頁の報告書にしてもらいました。イラスト入りというのを強調したいのです。私は美術の教員の教育を受けていますが、字をあまり読みたくないものですから、なるべく大きなイラストをたくさん入れて、読みやすいものにしてもらったわけです。

まとめた報告をもらったら、参加しているほかのパーティに１部ずつ送りました。自分たちで１つの報告書をまとめたグループでも、ほかの違った報告書を全部もらうことができます。こういったネットワークを作り、もらった報告書を見て、自分に当てはめることができるようなものがあれば、それを自由に自分用に取って応用し、やりやすいように進めていました。

先ほど環境を教材の１つとして使いたいと申し上げました。これは何か特別な環境ではなくて、どんな環境でも十分です。この仕事は、

当日のスライドより▼





**アイリーン・アダムスさんについて**

*ロンドンのサウスバンク大学教育研究所研究員＆環境教育コンサルタント。*

*1970年に大学を卒業後、美術教師として中学校に勤務。そのころイギリスで始まった「ストリートワーク」推進運動にかかわり、先進的な授業を開発し注目を集める。その後フリーとなり、デザイン学習及び環境計画学習のプログラムを開発するプランナー、さまざまなプロジェクトのコーディネーターとして活躍。*

*デザイン教育を基本としながら、まちの教材科、まちおこし計画の一環として学校の「歴史遺産学習」のカリキュラムづくり、子ども自身が公園や校庭をデザインするためのカリキュラムの開発、自然豊かな校庭のデザインやその活用方法の開発など、さまざまな分野で実績を積んできた。そのキャリアを活かして、大学ではプランナーや教師の卵に対する講義、現職の先生の研修にあたる。最近では、アメリカ、スコットランド、スウェーデン、アフリカなどにも仕事の枠を広げている。*

（11頁掲載のチラシより転載）

通訳のマーク・ダッカンさん

構造物、空間と人間の相互関係に基づいたものです。1つ注意していただきたいことは、建築家とプランナーと教員たちが一緒に集まって、1つの仕事をしようとするのは非常に困難なことです。なぜなら我々の言語がそれぞれ違っているからだと思います。

しかし、良いことが1つあります。全く違う分野の人に自分の考えを説明するときは、自分の考えをはっきりまとめることが出来るようになります。

私の仕事は教員と建築家とプランナーたちと一緒にやるわけですが、彼らの考え方、また仕事の仕方を知るのも私の関心事の1つです。彼らにとって何が重要な課題であるか。またその問題意識を持ったときに、どのようにしてそれを解決しようとするかを、私は知りたいと思っています。

最初に、ある場所に対しての認識、また愛着の度合いを知ることが大切です。それから例えば、何かのポイント、何かのアイディアについて価値を付ける、評価をするといった点もあります。デザイナーなどが、これからどのように変えていこうとするか、という考え方も入ってきます。

このような考えを新しいプロジェクトに当てはめようとします。例えば、ここで『ラーニング・スルー・ランドスケープ』を小学校の校庭にも応用したりします。最初は学校で仕事をしていたわけですが、これからはどんどん地域の中でも取り入れようとしております。

いまの私の仕事の多くは、教員の仕事をやっている人たち、または教育実習生のための研修会も含まれています。この仕事の大原則とは何か、また教えるときの姿勢は何なのかを考えながら、また教えながら進めております。また、こんな時にいろいろ集めてきた知識を、どのようにして広めるかについて方法を考えます。展示を使ったり出版物を出したり、テレビの協力を得ることもあります。

それでは、学校の生徒たちはどのようにかかわるかですが、まず日本でいえば、高校生ぐらいの年齢の子どもたちとやったときの例を挙げたいと思います。彼らは観察し、分析して、環境を評価するといった3段階を通らなければなりません。彼らは自分が見て発見したことをまとめて、お互いが発見したことを発表し合って比較したりする場面があります。それから協力して一緒になって現存の環境はどのようなものであるかを考えます。そこで私は何を言わなければいけないのか、言いたいことをどのように言うかということもさせています。つまり自己表現を育てるようにしています。

彼らの仕事の中で、これこそ変えなければならないといったものを見付けて、それを発表します。一緒に働き、一緒に研究して環境を改善するための提案などを考え出します。彼らは直接環境に出て分かったことをまとめて、どのようにまた新しい動きに当てはめるかを考えさせます。そして彼らは自分たちが考えるだけではなく、それをほかの人たちに伝え、その人はそれを聞いてどう思うかなど、他人の意見を取り入れることの大切さを教える必要があります。最後に生徒たちが、例えば地域の住民に自分が考え出した提案を伝えて意見交換をしたりする場面も持ちます。

生徒たちが実際にやっている学習を見てみたいと思います。現在の環境記録として絵を描くなり写真を撮るなりします。現存の環境を理解するために写真を使ったり、ビデオを使ったり、展示を使ったりすることもあります。環境の中にあった問題をテーマにした美術作品、捨てら

れたゴミで作ったものでアピールするときもあります。彼らは展示とシンポジウムみたいなものを催し、ゴミ問題についての話合いをしました。それから小冊子にまとめたりデザイン展示を行ったりすることもあります。

日本でいう小学校のレベルでの子どもたちの美術の環境教育の結果を示したいと思います。例えば、野外画廊のようなもの、あるいは数学的・算数的な遊びができる場所を作ります。環境というのは自然環境もかかわってきますので、自然環境を学ぶ場も作るようにしています。また、学校の生徒たちから、運動場は全部を普通に芝刈りする必要はないので、芝を刈るのをやめてみて、自然に帰したらどのようになるか、といった提案が出て、自然保護域に変えたりしました。

ある学校では、各学級で古い絨毯（じゅうたん）を持ち込んで、ネズミの家族が住めるようにネズミの家を造りました。そして毎週生きているかどうか様子を見にくるといった研究で自然との触れ合いをすることができます。

また都会の子どもたちのために、まず生き物に接する、植物に接する機会を持ってほしいということで、栽培技術などを教える試みもあります。芸術家やデザイナーたちと一緒に協力して、学校を視覚的にもっと楽しい所にするようなプロジェクトもあります。

例えば、私に「学校のカリキュラムについて何か話してください」と言ってきたら、それは何を意味しているのでしょうか。私の考えでは、形式上のカリキュラムというのは、先生たちが教えようと思っているものです。しかし、いわゆる本音のカリキュラムは、子どもたちがお互いから学び合っている事柄だと思います。そして隠れたカリキュラムもあります。これは環境を通じて子どもたちが知らず知らずのうちに学んでいくことです。

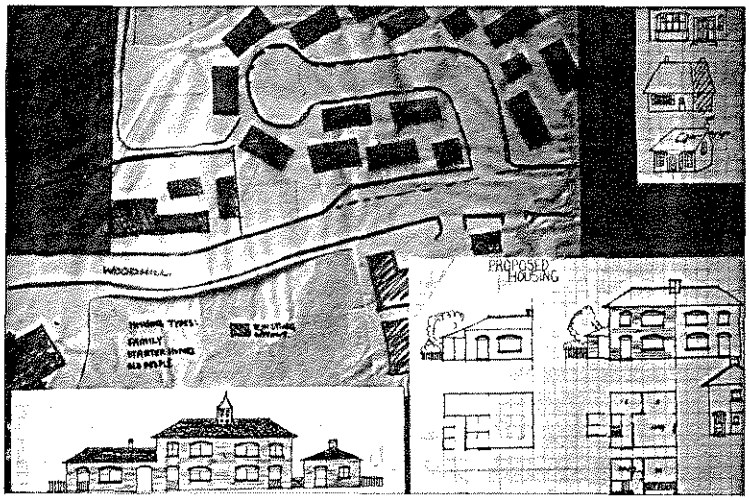
子どもたちの校庭に対する考え方が表れている学習内容をお見せしたいと思います。例えば、何が良くて何がいけなくて、何が効果的で何が効果的でないか、どこが非常にうまくいって、どこに問題があるかといったことを考えさせます。地図を作ったり、日光がどこに当たったり、どこが陰になったり、太陽についても風についても、いろいろ考えたり学んだりします。

また学校内の動線ということを考えることもあります。自分たちの考え出した、観察した動線などを見て、校庭のほかの使い方を考えることもできます。また学校から帰る前と帰った後、どのように変えることができるかも考えさせます。実際に何かを作ったり建てたりする前に、どのようになるかを模型を使って実験させます。

教員、建築家、プランナーが一緒になってやって、どのようにしてこのような結果を得ることができるでしょうか。まず、この地域ではどのような意識があるのか、またどのような方法を使って私たちは観察して分析し、評価すべきなのかについて、ある時は教員同士とか、建築家と教員の間でお互いに学習会を行ったり、生徒たちと一緒になって学習会を行うこともあります。

ここで私たちは、建築家やプランナーを教員にさせようとしているのではなく、逆に彼らには教員の持っている問題、制限をわかっていただこうとしています。そして自分たちは何を体験したか、何を学んだかという報告を作っていただきます。

このような方法を使って地域デザイン、住民参加のかかわったデザインに生かしています。子どもたちと、年配の方々が自分たちの関心のある事柄をいかにして変え



▲当日のスライドより

ようかという仕事をしてもらいます。子どもたちには、デザイン学習の中で学んだ視覚的学習内容のほかに、話し合い、議論し合い、比較し合うといった技術も身に付けてほしいと思っています。よい市民になるためには、相手が何を言おうとしているか、いかにして分かるか、また言葉は立派でも中身のないことを言っていることも見抜けなければいけないのです。

小さな例ですが、地元の行政のデザインした公園が、子どもたちの間ではさっぱり人気のないものでした。しかし、子どもたちはデザイン学習をして、自分たちが考え出した案を地域センターで展示しました。近隣住民も来て、お互いがこの公園をどのように改善しようかという話をしました。学校の中でやったのと同じような方法を使ったわけです。1日の終わりに地元の行政に提出する4つの提案を作り出すことができました。非常に実用的で現実的な提案になりました。

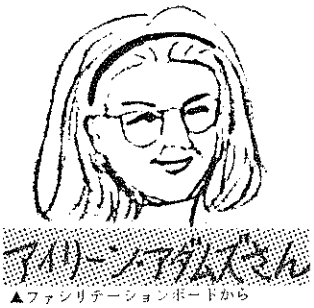
最後に中心になっている考え方をいくつかまとめたいと思います。環境デザイン教育というのは、どのようにして環境を良いものに変えていくかを考えるものです。さらに、それはクロスカリキュラム的なもので、各科目の視点から見るものでなければならないと思います。私は美術の教員ですから、美術はその中でいちばん重要ではないかと思いがちです。しかし、学校の中で実際のプロジェクトに当たったときに、国語の先生と社会科の先生、地理学の先生たちと仕事をすると、いちばん良い結果がいつも出てきたわけです。デザインを考えるということは、変化を考えることと同じだと思います。未来を視覚化し、先取りすることだと思っています。

イギリス政府は、いまのところどちらかというと、科学の高度技術の教育を強調しております。しかし、高度技術は、多くの問題を解決してくれてはいますが、さらにもっと大きな厄介な問題も生じさせています。私は、これからデザイン教育を用いて、このような科学上の高度技術をより創造的なもの、建設的なものに使うようにしたいと思っています。

先ほどの学校の中での仕事をもう1度思い起こしていただきたいのですが、これはただ私たちが遊びでやったのではなく、こうなればいいなという安易なものでもありませんでした。子どもたちが自分の考えが実際のものになった、また自分の環境を変えることができたということを知ることができました。子どもたちの判断したこと、また子どもたちが決定したことが、自分の環境とほかの人たちにまで影響を及ぼしています。彼らの考え出した案は、お金と努力の要るものでもあります。そして出来た後、管理も必要になります。子どもたちが自分の環境の中で責任を持って、いかにして生きていくかを考えさせる教育の場になり、非常に重要なものだと思っています。

イギリスでは、このように1歩踏み出したところですが、イギリスにもイギリス独特な環境の問題がさまざまあります。ですから、私たちはこれからまだまだ頑張る必要があると思います。教育者の1人として、私は自分の生徒たちが、よい解決を導くことができるように、是非指導したいと思っています。

またこの部屋の中の多くの方々も、私と似たような考え方の方がおありだと思いますが、これからはお互いの考え方の共通点、相違点などについて活発な話合いができたらと思っております。ありがとうございました。



▲ファシリテーションボードから

# 質疑応答

○延藤　小澤先生のほうから、いまのアイリーンさんのお話を踏まえて、日英の教育の仕組みの違いについて少しコメントをいただいて、後半の議論に備えさせていただきたいと思います。

○小澤　お話の中で、ナショナル・カリキュラムとクロス・カリキュラムというのが出ていたと思います。国でナショナル・カリキュラムが作られる前に、環境教育と市民教育については、1960年代に、イギリスでは教育の審議会が出したプラウデン・レポート（あちらではレポートに審議委員長の名前を付けます）で、環境を素材としてあらゆる教科で環境を取り上げるということ、スケフィントン・レポートで、都市計画をやる場合の市民の資質をきちんと育てるということが、うたわれているわけです。それを受けて、アイリーンさんたちの活動が1970年、80年代に活発化してきたのです。

ところが、初等教育の中で教員の資質などの問題があるために、日本でいう学習指導要領と同じようなナショナル・カリキュラムが作られ、日本でいう語学とか算数といった基礎的なコアのカリキュラムがあって、環境教育、あるいは健康教育、市民教育がクロスカリキュラムとして位置付けられているのです。そういったきちんとした抑えがある中で環境教育は、いま学校教育で展開されているのです。

もう1つ、地域の中で、それを受けてアーバン・スタディーズ・センターというのが作られてきたのです。ところが、サッチャーさんからだんだん予算が下りなくなって、閉鎖されている所が非常に多くなってきて、地域の中での学習も難しくなっている面はありますが、きちんとそういったことをサポートするシステムがあるのです。日本ではそういったものがあまりないので、地域では皆さんのご努力、特に建築家の方、都市計画の方がやっていますが、そういうものをやる場が、イギリスの場合には結構用意されていた、そういう歴史の過程の中で、アイリーンさんのお話があると理解しておいたほうがいいかと思います（図、表を参照）。

●原（世田谷区）
アイリーンさんたちがやっておられるデザイン実践は、地域自治体のまちづくりなどとどんな関係、影響を持っていますか。

○アイリーン　いちばん基本的な問題は、人々と接触するにはどうすればいいかです。地元の行政、自治体と接触するに当たって、いくつかの選択が与えられています。プロジェクトに入る前か、プロジェクトに入っている最中か、あるいは、プロジェクトが終わったあとに接触するという3つの選択です。

まず、終わったあとのことについてお話したいと思います。イギリスの役人、あるいは自治体では「何かやりたいのですが、ご協力ください」と言ったら、まずは「駄目」と言われます。そこで私どもは仕方なく密かにそのプロジェクトを進めて、それが成功したあと自治体に発表します。もちろんトラブルを避けるために、自治体のほうの優秀な建築家たち、プランナーたちの力をお借りしてやります。そうすると、大体自治体の方々が「そのとおりです、私たちのアイディアでした」ということになることがよくあります。でも、成功しなかった場合は黙っていました。

また、やっている最中に接触する、またはお知らせするといったケースもあります。例えば、私たちは何かを変えようとか改善したいというときに、提案を作って、それをプランニングの都市開発の課に出したとします。そこで、私たちは「実はこういう提案、こういうプロポーザルがあります。今度どこどこの何々で展示しようと思っていますが、いかがでしょう」というと、自治体でも時には慌てて、「自分たちも実は同じようなことを進めております」といって、そこで歩み寄るケースもあります。

しかし、これはいずれも理想の例ではなく、仕方のな

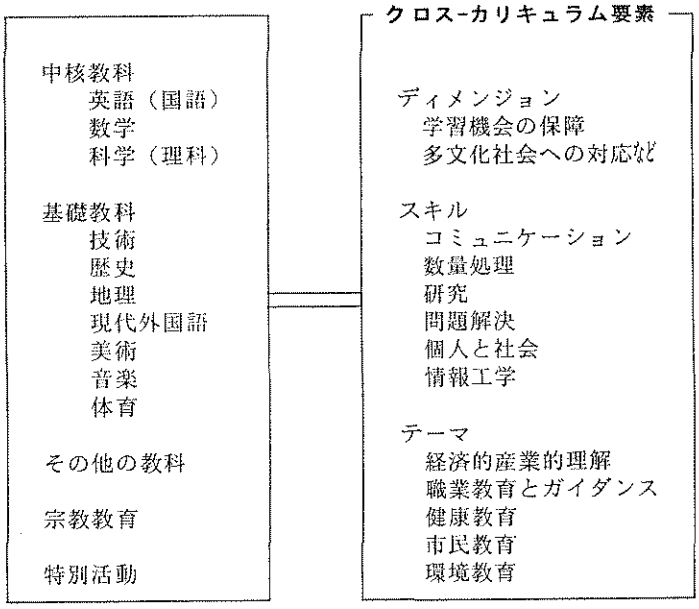


図　イギリスのナショナルカリキュラムとクロスーカリキュラム要素

いときのみの例題です。私たちはどなたも最初からプロジェクトにかかわっていただきたいと望んでおります。すべての関係者に、何をしようとして、そしてなぜそれをしようとしているかを知っていただくのが、当然の仕事の内容だと思っています。

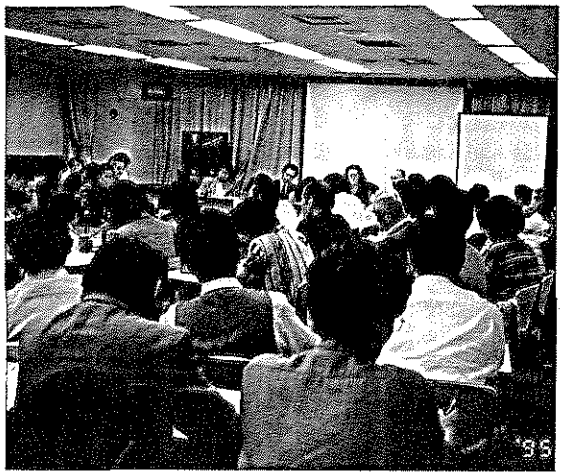
●岡村(早稲田大学)
子どもの意見をそのまま活用するのにも問題があるのでは。大人の側の修正が必要になると思います。その辺の適度な緊張関係をどのように保っているのでしょうか

○アイリーン　私は教師の責任として、答えを与えるのではなく質問を投げかけるのが仕事だと思っています。

デザインとは自分が得たいものを得るというようなものではありません。自分たちの望みと他人の望みをどのようにバランスよく得るか、どのようなよい結果を歩み寄って得られるかという問題ではないかと思います。自分にとって何が重要なのか、他人にとって何が重要なのかを常に比較している必要があります。ですから、価値観の対立がどうしても起こります。デザイン・プロセスというのは、対立するもの同士の解決を導き出すところにあると思います。

例えば、私はある町で暗渠(あんきょ)化された1つの川を、もう1度地面に出して、植物がそこでまた生息できるように復活させようといった計画があると伺いました。私たちはまず「ああ、なんと素晴らしい。また町に自然が帰ってきた」と思いがちです。しかし、近隣住民は川に住んでいるようなカエルとかネズミが、自分の台所に入ってくるのは困るなどということを言ったりします。ですから、そこで生じる課題は対立し合う価値観をどのようにして歩み寄らせて、どのようなよい結果を得るかにあります。ですから、規制されること、その中でチャンスがあれば、それをつかむこと、それがどこにあるかをまず認識して、そのデザイン・プロセスを踏んでいくことを考えなければならないと思います。

●根岸
環境教育は幼児保育にも必要ですが、日本従来のしつけとどう違うのでしょうか



▲　会場の様子

○アイリーン　幼児と言われる年齢の子どもたちは、非常に豊かな自分の触覚、視覚、聴覚の豊かな環境を必要としています。そのような子どもたちにとって他の子どもたちと遊ぶこと、また環境を遊び相手にすること、協力し合うこと、協調性を育てることなどの必要がたくさんあるわけです。これは決して本や教科書を通して身に付けるものではなく直接的な環境とのかかわり合いによって生まれてくるものです。そしてこの年齢、この年ごろに得たものは一生、死ぬまでその子どもたちの感性になっていくわけです。

イギリスでは学校教育は5歳からです。私が5歳の時のことを思い出しますと、自分で家を造ったり、テントを張ったり、宝島を造ったりいろいろな想像を働かせて遊んでいたのですが、これは全部祖母の家の裏庭で行った遊びです。同じような遊びを4歳でも5歳でもやっていました。しかし、4歳の時と、5歳の時で何がいちばん違うかといいますと、5歳で学校に入って、ほかの子どもたちと、そのような自分の体験を話し合って、また刺激し合うことができました。そのぐらいの子どもたちでも自分の体験を思い出して、ほかの人たちの経験と照らし合わせることも、子どもにとって重要なことだと思います。

教育の中での美術という科目は、自分が自分で体験し

**表　クロスーカリキュラム・テーマに示された環境教育の内容構成**

| 環境についての教育<br>(about) | 環境のための教育<br>(for) | 環境の中での教育<br>(in) | 環境を通しての教育<br>(through) |
|---|---|---|---|
| ・気候<br>・土壌、岩石および鉱物<br>・水<br>・物質と資源、エネルギーを含む<br>・植物と動物<br>・人類とその社会<br>・建築、工業化と廃棄物 | ・現在および将来における環境の確実で注意深い利用法の発見<br>・対立する興味や異なった文化が存在することを考慮に入れた環境問題の解決法の発見<br>・しなければならない選択を行う | ・環境教育の主眼点は直接体験を含む児童生徒自身による調査や研究におかれるべきである。<br>・フィールドワークは初等中等教育学校において、果たすべき重要な役割をもつ。<br>・それは学習するための刺激として環境に近づく機会を与え、それと同時に環境についての認識と興味を深める機会を与える。 | |

(図表とも、「野上智行編著『環境教育と学校カリキュラム』東洋館出版社」をもとに一部加筆した)

たことを、さらにもう1回考えて別の形に消化して吐き出していく、何かのものに活用していくというところにあると思います。

しかし、ここで1つ注意したいのですが、イギリスである詩人が「何かについて書くことは、それを殺すことになる」と言っています。そこで1例を挙げたいと思います。14歳の子どもたちのクラスを受け持ったときです。週1時間、彼らの指導に当たっていました。最初に、彼らに言われたことは、「都市環境の中の教育とは何なのですか、先生」ということです。「これを選択したのは君たちだから、君たちが私に逆に言いなさい」と言いました。「視覚学習ということは文字を書く必要はないですね」、「じゃあ、都市環境ということは、学校の中に閉じこめられることはないわけですね」と期待あり気に言うのです。「それは当然ですよ、学校の中から出ていかないと、町に出ていかないでどうやってわかるのですか」と答えると、大喜びで「やった、こんないいことない。もう学校にいる必要もないし、あとで報告書とかレポートを書く必要はないんだ」と。これがバランスというものです。

●斉藤(世田谷区)
このようなデザイン教育を通して、子どもの親や子どものいない大人へはどのような影響や反応がありましたか

○アイリーン　まず、その子どもの親は、自分の地域の環境、また問題などについて関心の高い子どもたちが育ってきたことを目の当たりに見ることができます。また自分の言語的能力が良くなってきます。また自分の学習に関して誇りと責任を持ってやる子どもが育つのを見ています。そして、子どもたちは自分の住んでいる町の人たちに重宝されていることを感じることもでき、それで精神的に非常によい影響を受け、その影響がその親たちにも及んでいるということが確かに起きています。

今年イギリスでは、子どもを環境を変える刺激物として考えるという報告がありました。私はこの仕事を通して、子どもたちが刺激物となっていることを見ることができました。子どもたちが上手な環境、いい環境教育を受けた所では、町の大人たち、親に対してもよい影響を及ぼしているということを見ることができました。

●海津(アースワーク)
環境デザインを学んだ子どもたちは、その後どのような人材に育っていきましたか

○アイリーン　どのような人材に育っていくかとか、卒業後はどのような活動をしているかに関して、私たちはそのように長期的な調査、研究を行うだれけのお金は与えられていませんので、したいところですが、正直なところ分かりません。しかし、個人的な例ですと、私は知り合いの人たちで申し上げられることもあります。14歳のときに教えた2人の生徒たちに出会った話をしたいと思います。1人はIBMの社員、もう1人は骨董品を修理する仕事をしていました。彼らを王立美術大学院に「昼食を一緒に食べよう」と誘いました。そして、たっぷりくつろいだあと、「学生時代の環境デザイン学習のときの思い出はどんなものがあるか」と聞いてみたのです。そして「やあ、先生、何というのかな、特に美術を学んだ覚えはないのですが、私たちは生き方を覚えたような気がした」と言ってくれました。「自分の考えをまとめたり、どのように解決をするかをよく学んだわけです。私たちはものの考え方について、たくさん学んだと思います。物を分析し、評価するといったことを習ったような気がします。ほかの人たちとのコミュニケーションをどのようにうまくとるか。また自分のやりたいことをどのように実行できるかといったことも。これはIBMで大変役に立ったことです。大きく言えば、私たちは学ぶことを学んだ。新しいアイデイアを取り入れて、自分なりにどのように処理していくか、どのように扱うか分かった」と言ってくれました。

大人になった彼らは、非常に楽観的で、しかも努力家で、また新しいことを常にやろうとする人たちになりました。彼らを見て「自分の教育の仕方は成功したな」と私は思いました。私たちは人工的な環境について焦点を合わせていたわけですが、もっと大きな意味で言うと私たちは「人生はどのように生きていくか」、「社会の中でどうやって生きていくべきか」を学習していたと思います。

●石崎(北海道開発庁)
日本において教員や親たちに、この教育の必要性をどのように感じてもらうか。その突破口はどこなのか

▲ファシリテーションボードに貼られた質問や意見を読み上げる　木下委員と町田委員

●大倉（アスデザインアソシエイツ）
建築家、プランナー、先生が一緒に話し合えるような学校にするには、どうしたらよいか。何かよいアドバイスがあったらお願いします

○アイリーン　私は日本の現状に精通しているわけではありませんので、よい答えはできないとは思いますが、いくつかの案を投げ出して、皆さんでそれを受け入れるなり、捨てるなりしていただいて、自分にとっていちばんよい方法を選んでいただければと思います。

まず私たちの場合は、『フロント・ドア・プロジェクト』で、きちんとした裏付けがあって始めたので、比較的やりやすかったかもしれません。私たちは10の学校に声を掛けて実験していただきました。そこで同じような問題を解決するための何通りかの解決案が、その中で出されたわけです。ロンドンで本拠地のようなものを設けていました。プロジェクトには名前が付いていて、アイデンティティがはっきりしていました。全国から建築家やプランナーたちを集めて、国のレベルで行うことができたわけです。そこで1年間に教員のためのセミナーなどを何百回も行いました。建築家やプランナーの皆さんにも声を掛けてみました。

これは1日でやるセミナーだったのですが、私はわざとどんなに頑張っても終わらないようにしました。その訳は、「この続きは自分たちの学校でやってみなさい」ということでした。そうすると、大体の教員たちは「分かりました、やってみよう」ということになります。多くの場合、教員の方々から「でもこの方法はちゃんと効果があるかどうか分かりませんから、ちょっと教えてもらえませんか」と言われますが、そこで私は「このようなことは1人でやるにはあまりにも難しいので、是非地元の建築家とかプランナーに声を掛けて、また子どもたちと混ぜてやってみなさい」と奨励しました。そして、建築家やプランナーの皆さんは、非常に熱心に一緒になって働いてくれて、積極的に学校にも出向いてくれました。ワーキング・パーティはこのように始まりました。

そして、報告書をもらって、それを印刷物にしましたが、それを書いた人たちが自分の書いたものが活字になったのを見ると、何か新しい権威が乗っかったような気がして、ますます頑張るし、ますます自分の地位が上がったように努力するわけです。これは雪ダルマ式にどんどん加速が付いて、資料が入ってはまた出てネットワークがフルに活用されて、池に小石を投げたときに出てくる波のように、どんどん外へ広がっていきました。

またここで建築家やプランナーの皆さんにとっても、自分の町での非常によいＰＲになりました。「こんなに良心的な建築家さんなのね」と見られるようになったのです。自分がプロジェクトをボランティアでやっていると同時に、市場調査、また自分のＰＲ活動をしているような効果もありました。そして全国レベルでは、彼らの仕事が出版物になったり、いろいろ報告されたりして知名度を上げる効果がありました。私たちのこのプログラムと同じような効果を得ようと思ったら、全国的なネットワークが必要になります。どこで何をしているかといった情報をバラ撒く本拠地なども必要になってきます。

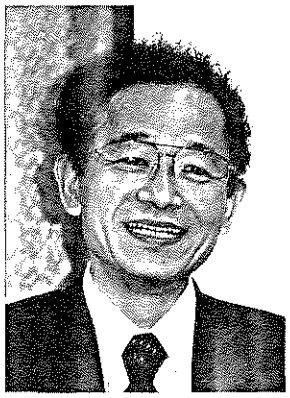
また、3種類の専門家がいることを認識していただきたいと思います。まず建築家とプランナーと造園家の皆さんは、環境デザインの専門家です。教員は、学習、教育の専門家です。子どもたちは、地域の専門家、自分の住んでいる環境の専門家です。ですから、子どもたちの専門知識をいかに活用するかを是非考えたいところです。

＊　＊　＊

最後に、皆さんとはまるで同僚のような気がしますので、1つ言わせていただきます。問題は学校のカリキュラムではない。つまり、学校のカリキュラムをこなすには、こんなに時間が要る、このような厳しいスケジュールがあるから、試験があるから、受験制度があるからという問題ではないと思います。これは主に教師の動機付け、または学習指導要領の解釈によるものだと思います。

自分の例を1つ個人的に挙げたいと思います。例えば、うちの校長が私の所にやってきて、「アイリーンさん、生徒たちと住宅のプロジェクトをやりなさい」と言ったとします。まず、私はそこで「とんでもないですよ。住宅なんて建築じゃあありませんよ」と言ったかもしれません。そこで校長先生が私に「じゃあ、今度生徒たちと写真による住宅のプロジェクトをやったらどうですか」と言ったとします。そういうときは「とんでもない。私は画家です。写真家ではありません」と多分断ったでしょう。しかし私は、そうは言われませんでした。「あなたがこの地域の建築空間を見て、子どもたちと研究しなさい。また方法を自分で考えなさい」と言われたわけです。そして、私は数週間自分でやってもみたのですが、どうにもならず途方にくれてしまって、校長先生の所へ行きました。そのときに私は「教科書もないし、スライドもないし、何の教材もありません。どうすればいいのでしょうか」と言ったら、「あなたは素晴らしい教材を持っているではありませんか。建築家がいるでしょう、環境があるでしょう、あなた自身がいる。さっさと仕事をしなさい」と厳しく言われました。私も日本の皆様に同じことを申し上げたいと存じます。

▲総合プロデュース・まちワーク研究会が作成した「アイリーンさんの講演と交流ツアー」のチラシ（表・裏面）



# 近藤先生のまとめ

環境教育というテーマは、イギリスでは古い歴史を持っているとともに、現代では1960年代、70年代からムーブメントとして非常に高まってきた。今日、日本でも1980年代、90年代を迎えている中で、同じような問題意識と取り組みが始まっています。そういう意味では、我々は、同時代の重要な現代社会における本質的な課題としての環境教育、環境学習というテーマに、向かっているのではないでしょうか。イギリスも日本も、非常に高度に発達した文明の力を生活環境の中にたくさん抱え込んで暮らす大人、子どもが住む国ですが、高度に発達した文明社会は、ともするとファミコンやテレビゲーム等と遊びの現場でも代表されるように、対象を巧みに操作するという、対象操作型のテクノロジーがものすごく発達しています。

でも、人が居心地よく住まうというのは、環境に対して自ら能動的に関わるという関わり方が重要なのではないか。対象操作のテクノロジーを生かしながらも、その反面、デメリットを来たしていることに着目しながら、それを乗り越えるための環境とのかかわり合いのデザインを仕組んでいくことが環境学習につながっていくのではないか。いわば環境学習は、環境に人間が能動的にかかわるデザインではないか。環境学習は、そういう重要な意義を同時代の課題として抱えているように思います。

今日のお話では、そうした高度に発達した文明社会を乗り越えていく新しい時代の社会的課題としての環境学習を、どのようにプロモートしていくのか。プロモートしていくためのキーワードやプリンシプルといったものを、いくつもいただいたように思います。私なりに4つ、5つこれからの我が国における環境学習を進めていくときの重要な原則やキーワードをすくい上げてみたいと思います。

## Negative capability

第1点は、**ネガティブ・ケイパビリティ（Negative capability：否定的なことを肯定的なことに変える態度）**という視点ではないかと思います。我が国では、文部省がカリキュラム編成権を持っていて、学習指導要領に沿った枠組みに閉じこめられた極めて否定的な状況に置かれている。それに対する批判の声は非常に高いのですが、今日のお話はそういう否定的な現象や、ネガティブな状況を乗り越え、むしろそれを逆手に取ってポジティブな側面に切り替えていくという、我々大人や教師のスタンスが問われているのではないか。状況はネガティブであっても、それを可能性に変えるというネガティブ・ケイパビリティという視点が全体の議論の筋の中に通っていたように思います。

具体的に、イギリスでもフォーマル・カリキュラムは文部省を通して全国に流されているわけです。しかし、現場では教師1人ひとりが、それを本音のカリキュラムに変えるのだというお話がありました。本音のカリキュラムというのは、子どもたち自身をワクワクさせる。その中で、子どもが何か変わっていく。いわばヒドゥン・カリキュラム（hidden curriculum）、隠れたカリキュラムを作っていくのは、現場の教師自らではないか。知らず知らずのうちに子ども自身が学んでいくような状況づくりに、いかに現状が否定的であろうとも、それをポジティブに変えていくしたたかなセンスと態度を、我々は身に付けようではないか。全体の政治や制度の枠組みから、ずらしていく、逸脱していくエネルギーを、我々大人や教師、専門家集団が身に付けていくべきではないか、という基本的態度が全体の流れの中に鮮明に映されていたように思います。

## Sharing direct experience

第2に、イギリスの経験に学びながら、日本の状況に照らして極めて示唆的なことは、**シェアリング・ダイレクト・エクスピリエンス（Sharing direct experience：直接的経験を分かち合う）**というキーワードではないかと思います。現場の中で生き生きとした身近な環境との具体的経験を、教師と子ども、専門家と子ども、大人と子どもたちが分かち合うという、現場の具体的な環境との取っ組み合いや学び合いや遊びの経験の中に子どもたち自身が、環境に対して耳をすまし、自ら発見をし、感動し、それを表現する、いわばチューニング・イン・ザ・エンバイロンメント、環境に耳を傾けて、ラジオのチューニングが同調するときに、美しい音が発信するという、環境との共振するといった状況づくりを、教師や専門家や大人たちは、子どもたちにどのように仕掛けていくのか。そういったクリエイティビティに富んだ環境学習の仕掛けをしていく中で、子ども自身が自ら責任意識を持ち、何かアクションの中で変わっていくという、具体の経験の中で学ぶことを分かち合うことが非常に重要ではないか、とおっしゃっていたように思います。

## Action oriented programme in open end

第3点は、**アクション・オリエンテッド・プログラム・イン・オープン・エンド（Action oriented programme in open end：未来に開かれた楽しい**

**行動志向型プログラム**）、未来に開かれた楽しい遊び、学習ワークを重ねながら事を進めていく。何かカリキュラムというシステムを作るよりも、むしろ遊びの中でおのずから何かが生まれてくるのではないかという話は、非常に示唆的でした。具体的には校庭を変えてみようという課題。校庭というのは、どの地域でも子どもの日常の環境の中に置かれているわけですが、イギリスでも日本でも冷たく堅苦しい場所です。でもイギリスでは子ども自身が、「こんな校庭にしたいな」というつぶやきから始めて、草いっぱい、水もある、虫が寄ってくるという生き生きとした自然の息づく場所づくりに子ども自身が赴き、そして、時にはカーペットを敷いて、子どもたちがネズミの家づくりを学んでいくという、ドラマティックなアクションを起こしていくお話が非常に印象的でした。そういう具体のアクションをどのように楽しい行動として開いていくのか。その出来た環境をさらに子どもたち自身が学び舎にしていくという、時間軸の中で、未来に絶ゆまぬ開かれた学習プログラムが仕組まれているのではないか。そこではシステマティックなプログラムというよりも、遊び心の満たされた状況の中で、漂流するような新しいセンスを持った学習プログラムが待たれているのではないか。そのことは学校教育だけではなく、家庭においても大人自身が子どもとどうかかわるかとも関わっている。アイリーンさんは自分が5歳の時に、おばあさんの家の裏庭で、おばあさんと遊んだ経験が、今日彼女をいろいろなセンスに満ちた環境教育の仕掛人にさせた1つのエネルギーの源泉になったとおっしゃったことにあらわれていました。1人ひとりの大人が、あるいは地域社会で日々過ごしている他所の子どもたちに対しても、何か絶ゆまず日常の生活の中で楽しい仕掛けを仕組んでやるような、そんな開かれた気持を持つ大人の存在が子どもを助けていくのではないかと思うわけです。

## *Cross over conflict values*

4番目のキーワードは、**クロスオーバー・コンフリクト・バリューズ（Cross over conflict values：価値対立を融合する）**というテーマではないかと思います。いわば環境づくり、環境学習の中では、価値の対立が必須である。しかし、価値の対立を否定することなく、むしろ価値対立をエネルギーと見立てよう。むしろ自分と他者の意見の食い違いは当然であって、そこからデモクラティックな人間づくりや、価値の対立を乗り越えて、人工環境の中に自然を呼び込むことができるようになるのではないか。自分と他者、あるいは人工と環境も、ともすれば対立的に捉えがちですが、むしろお互いに支え合うような関係づくりに向かう、いわば対立するものをバランスある関係の中に置いてみるという発想が非常に待たれているのではないか。そのことに向かって子ども同士、あるいは子どもと教師、子どもと専門家がいろいろな状況の中でコラボラティブなワーキングを、協働的な作業を分かち合っていく、その体験型の学習の仕掛けが価値の対立を乗り越える具体のプロセスになっていくのではないか。そういう経験を潜り抜けていく中で、子どもたち同士は相互に認め合うような、よき人格の関係づくりに向かっていく、という話に結び付いていっていたように思います。

## *Informed citizenship*

第5に、イギリスの経験から学びつつ、我が国の環境学習の中でも重要視したい視点は、**インフォームド・シティズンシップ（Informed citizenship：環境に対して良識ある市民意識）**ではないか。市民1人ひとりが良識のある環境に対してよい見識を持った大人になっていくという意味合いがインフォームド・シチズンシップという言葉で語られていたように思います。子ども自身が機会あるごとにアクティブに環境にかかわっていき、その態度を形成し、そしてセンスを磨いていき、そして大人になっていく過程で環境をより良いものに変えていくような能力を持つ大人に変わっていく。その過程というのは、単に子どものころに学んだデザイン教育、環境学習は、単なるデザイン・スキルではなく、むしろライフ・スキルだ、と彼女はきっぱり言ってのけた。環境学習は、単なる環境に対するかかわり方や、感動を表現する表面的な技を学ぶだけではなく、それもとっても大事なことであるが技とともに生き方（クオリティ・オブ・ライフ）という生活の質、生きることの価値を高めることが本質とみなされるべきではないだろうか。子ども自身が環境の自己決定の主人公として育っていくとともに、子どもがそのような周りの環境に生き生きとかかわっていく状況の中に、大人も巻き込まれていくと、大人も生き方を変えていくのではないか。子どもを通して大人も変えられるのではないか。未来の意思決定者は子どもであると同時に、子どもが少しずつ変わることは、大人の作った社会自身も内面から変えていくことができるのではないか。環境学習という仕掛けは、そういう意味で子どもだけではなく、大人自身、この社会を危うくさせているいろいろな深い問題、そういうマクロに対しても、ミクロから何か大きなエネルギーを発信させる仕掛けではないか、ということが語られていたように思います。

我々自身が日ごろ環境学習やいろいろなまちづくりのことにかかわって悩んでいたことが、アイリーンさんのお話の中で、少し向こうが見えてきた、新しい地平を開かれたような気がします。

最後に、こんなに示唆的なお話をいただきましたアイリーンさんに、そしてとても分かりやすい通訳をいただきましたダンカンさんのお2人に、私たちは心を込めて感謝の拍手を送って終わりにしたいと思います。また、今回のこういう素敵な企画を中心になってやっていただきました結・まちづくり研究所の荻原さんに一言ご挨拶をいただいて終わりにしたいと思います。

**○荻原**　今回、まちワーク研究会という組織を新たにこのために組織しました。この企画はとても反響があって、皆さんこういう話題がすごく欲しいのだなということがよく分かりました。今後も分野を超えたネットワークを作っていきたいと思います。

## ■■■ 住教育フォーラム・アンケート結果 ■■■

第９回フォーラムの会場で、参会者の方々にアンケートのご協力をお願いいたしました。７６票の熱心なご回答を得ることができました。皆様からいただいたご意見は、今後の住総研住教育委員会の活動に反映させていきたいと思います。
主なご意見を以下に紹介させていただきます。

### ●本日のフォーラムはいかがでしたか●

最近の学校教育の現状に疑問を持ち、ちょっと暗めの気持ちで参加しましたが、環境教育を考えることを通してよい市民になって、**住民も行政も共に育ち合っていける関係を築ければよい**と思います。アイリーンさんの教え子たちが**「生き方を学んだ」**ということが**印象的**でした（Ｍ．Ｓさん）

とても**具体的**で**分かりやすく、示唆に富んで**いました（Ｔ．Ａさん）

子どもが参加できるまちづくりを日頃より考え、現実はなかなか難しいと感じていましたが、**勇気づけられ**たような気がします。（Ｈ．Ｉさん）

日本に比べ、イギリスでの**環境デザイン教育**が**重要視**されていることに、**大変ショック**を受けました。また、美術**教育のあり方**を日本も国を含め、改めて**考え直す必要**を感じました（Ｃ．Ｏさん）

### ●住教育委員会にどのような活動を期待しますか●

合意形成の仕方や意識啓発の仕組みを紹介する**海外の事例フォーラム**を期待します（T.Tさん）

**子どもたちが参加できるワークショップ**なども企画してみては？（K.Tさん）

**ワークショップ型やトレーニング型のプログラムの開発**を期待します。（T.Oさん、M.Hさん）

住まいづくり、まちづくりを実践している方々との交流機会を望んでいます。例えば**「環境教育」などの１つのテーマを継続的に研究していく部会**等があると続けて参加してみたいと思います。（Ａ．Ｓさん）

小さな集まりや子どもや女性の視点のない会等**地方や自治体の会に出向いて、住教育や環境学習を浸透させる活動**をして欲しい。（Ｅ．Ｎさん）

環境教育をするためには、身近な住空間に、より豊かな環境がなければ、向き合うことができないし、体験もできない。しかし、現状の都市計画は、大人のためのデザイン化された空間づくりであり、子どもが自由に描く空間は年々減少している。**現実の都市計画の中に、子どもの視点をどう盛り込んでいくのか自治体の中にどうその発想を持たせるのか、**自治体職員参加でのフォーラムを（H.Uさん）

教育の現場を、どうまちづくりに関わらせるかというのが現在の課題だと思います。**先生たちの意識改革**を進めるような活動が必要だと思います。（Ｍ．Ａさん）

ご協力ありがとうございました。

第１０回住教育フォーラム（1995年10月31日開催）の記録を掲載した『住・まちづくりフォーラムかわら版10号』は、来春お届けいたします。
皆様、よいお年をお迎え下さい。

住・まちづくりフォーラムかわら版（仮題）　9
１９９５年１２月１４日発行（非売品）

発行人　大坪　昭
発行所　財団法人　住宅総合研究財団
〒156　東京都世田谷区船橋4-29-8
℡03-3484-5381　FAX03-3484-5794
事務局　間宮 昭朗、小菅寿美子、平井なか